

第二次立憲体制期の政治動向

設 樂 國 廣

キーワード

統一と進歩委員会 第二次立憲体制 三頭政治

はじめに

一九〇八年の青年トルコ人革命は、一八七六年制定のミトハト憲法復活を目的とし、オスマン帝国に第一次立憲体制を成立させた。しかし、革命の中核とされる統一と進歩委員会の当初の目的が憲法復活のみであり、憲法復活後の立憲体制への対応は、未確定であった。ムスタファ・ケマル^②やイスマト・イノニユなど構成員の多くを占めている軍人は、革命の成功の暁には、軍務に復帰すべきであり、その後の政治問題は政治家に任せるべきであると主張した。一方、エンヴェル等は、立憲体制に、統一と進歩委員会を

秘密結社としての性格を保ちながら、政治組織としての中央委員会を創設し^③参加を希望した。充分な政治活動への準備も無く、伝統重視をするオスマン政治への介入は、容易ではなかった^④。統一と進歩委員会は、強引な工作によって、オスマン政治への介入を試みたが、その力量の不十分さは、直ちに独自の政権を樹立することはできず既成の政治家に依存しなければならなかった。また、オスマン政治家は強力な権力基盤に依存する傾向があり、この革命後の混乱は、オスマン帝国に政治不安をもたらし、社会不安へと発展した。さらに対外政策の空白は、ブルガリア公国の分離独立、オーストリアによるボスニア・ヘルツェゴビナの併合、ギ

ロシアによるクレタ島の併合、トリポリ戦争（伊土戦争）、バルカン戦争、第一次世界大戦と外圧による領土喪失を進行させ、オスマン帝国を崩壊へ導いた。

統一と進歩委員会の革命期および、三・三一事件における動向についての、研究はあるが、これら既成政治家と統一と進歩委員会との関係についての論考はみられない。小論は、この両者の関係を考察し、青年トルコ人革命期の政治権力構造の一端を解明したい。

スルタン、アブドウル・ハミド二世の専制政治

スルタン、アブドウル・ハミド二世の専制政治は、一八七八年の第一次立憲体制の終了時から一九〇八年七月二三日の憲法復活までの間である。彼の専制政治は、オスマン帝国の私的支配であった。国家機構としては、第一次立憲体制期のものが維持されていたものの、これを監督・管理する全ての部門が、スルタンの私的活動を担当する宮廷府 Mabein⁽⁸⁾の影響下にあった。

スルタン府には全面的に統治機構を管理する体制が整備されていた。スルタンの執務室に連絡のため自由に入出入りする宮廷府官房長以下、多数が、国家の統治に関する業務を処理していた。アブドウル・ハミド二世は、人事につい

ても細部にわたって熟知していた⁽⁹⁾。また、文書局は、スルタン出および、スルタン宛の文書を管理しており国政の重要問題に深く関与していた。さらに、アブドウル・ハミド二世は、国有財産を、スルタンの個人財産に編入するなど国家財政をも私的に管理し、スルタン府の財政基盤をより強固なものにしていた。これによって、スルタン、アブドウル・ハミド二世は自身の私的判断で多額の予算を運用でき、ますます強大な権力を把握することができた。アブドウル・ハミド二世の専制政治体制下ではスルタン府に権力が集中し、また、スルタン府維持のため諸官庁との間に官僚の人事交流も行われ、官僚層は昇進に伴い、個々にスルタンと結びつくことが自らの地位を確保する手段となった。この体質は、オスマン官僚体制に深く浸透し、アブドウル・ハミド二世の専制政治に反対する運動への参加を阻止する力となった。統一と進歩委員会等の青年トルコ人は、官僚体制と直接関係の薄い者や、若手軍人および知識人を中心に構成されていた。これが青年トルコ人革命の特色であり、政権担当を可能とする人材の欠如をもたらし、統一と進歩委員会の構成員による政府樹立が遅れた理由であった。

統一と進歩委員会

青年トルコ人革命後、統一と進歩委員会は、オスマン帝国の政治に介入を計画したが、オスマン政府と直接関係を持った者が全く存在しなかったため、行動拠点であったサロニカからイスタンブルに代表団を派遣するため、それまで弾圧側にあつた内務官僚のマナストウル、サロニカ、コツソヴァ三州総督ヒュセイン・ヒルミ・パシヤにオスマン政府との仲介を依頼しなければならなかつた。スルタンおよび旧来のオスマン政府は青年トルコ人革命後も存続しているのであつて、統一と進歩委員会は、何の公的地位も確保できなかつた。統一と進歩委員会の事務局長ミトハト・シユクリユ・ブレダは、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤに対する仲介依頼について、統一と進歩委員会の組織生命を賭けたと述べている¹³。

ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、統一と進歩委員会のこの申し出を受諾し、イスタンブルのオスマン政府、およびスルタン府との交渉の便宜をはかつている。ヒュセイン・ヒルミ・パシヤの許可により、統一と進歩委員会の代表団は、安全にイスタンブルで活動を始めることができた。しかし、イスタンブルでの統一と進歩委員会に対する処遇は、極めて冷淡であつた。これは統一と進歩委員会の憲法復活

運動に対して、一部では評価されながらも、青年トルコ人革命直後は立憲体制下の有力勢力とは考えられていなかった。統一と進歩委員会は政治的にまだ充分考慮されていなかった。

統一と進歩委員会の中央委員会の代表団は、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤのオスマン政府への工作により八月になつて、初めてイスタンブルに入ることができ、ただちに、スルタンやサドラザム（大宰相）サイト・パシヤとの会見に成功した。しかし、スルタンは、統一と進歩委員会の影響力を評価し、その力を利用することを考え、自ら「私は青年トルコ人のひとりである」とのべた。一方、サイト・パシヤ内閣は、統一と進歩委員会のイスタンブル進出に難色を示すなど、その影響力に警戒の念を持っていた。サイト・パシヤにとつては、立憲体制がスルタンの専制政治を停止させることができ、オスマン帝国伝統の官僚政治家による政治体制が復活し、サドラザムの行政権限を幅広く手中に収めようとしていた。このため、スルタンとサイト・パシヤの対立が発生した。憲法復活の前日の一九〇八年七月二二日に成立したサイト・パシヤ内閣は、フェリト・パシヤ前内閣の閣僚が留任し、新たにサイト・パシヤと無任所大臣のキャミル・パシヤが加入したものであつた。立憲体制による新体制確立のためサイト・パシヤは八月初頭内閣改造

に入つたが、陸軍大臣および海軍大臣の任命に関してスルタンは統帥権を主張し、サイト・パシヤの両大臣の任命に干渉した。これにより、サイト・パシヤは組閣に失敗し総辭職を余儀なくされた。¹⁹⁾ 憲法の規定によりサドラザムとシェイフル・イスラムの任命権を持つスルタンの権力は依然として強力であつた。スルタンとの結びつきによつてこれまで六回のサドラザムを経験したサイト・パシヤはスルタンとの対立で自己の基盤を失つた。このため、サイト・パシヤは、統一と進歩委員会への接近を試みた。²⁰⁾ 統一と進歩委員会はこの政治的対立に充分関与できなかったが、一勢力としての動きをはじめた。自己の勢力拡大の重要性を認識した。そして、新たに召集されるオスマン帝国議会の民衆院 Meclisi Mebusan の代議士獲得に重点を置き、議会での多数派工作を進めた。

サイト・パシヤの後任サドラザムにはキャミル・パシヤがスルタン、アブドウル・ハミド二世によつて任命された。キャミル・パシヤは、イギリス政府と極めて密接な関係にあつた。²¹⁾ オスマン帝国に多大な影響力を持っていたイギリスは、キャミル・パシヤを支援し自国の勢力拡大にあつた。憲法復活後、キャミル・パシヤは、混乱するオスマン政治体制下において、イギリス政府を背景として政治的地位を確立した。このため、スルタンの統帥権に関する問題

は、統一と進歩委員会の介入もあり、トリポリ州知事兼軍司令官レジェブ・パシヤが陸軍大臣に就任することで妥協が成立した。²²⁾ キャミル・パシヤは、統一と進歩委員会に批判的立場をとつており、統一と進歩委員会との協力関係を作ることは消極的であつた。これは、統一と進歩委員会が政権に接近する企てに障害となつた。統一と進歩委員会は、キャミル・パシヤとの対立を原因としてイギリスとの関係を希薄にさせていった。²³⁾

統一と進歩委員会は、政権接近のためマケドニア問題処理の実績をもつてオスマン政府に発言力を持ち始めたヒュセイン・ヒルミ・パシヤとの協力関係を強化した。統一と進歩委員会が、組織の命運を託した人物ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、自身がオスマン政界に強力な地盤を築くために、キャミル・パシヤがイギリス政府を背景にしているように、統一と進歩委員会に接近した。²⁴⁾

ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、一九〇八年一月三日、キャミル・パシヤ内閣の内務大臣に就任した。ヒュセイン・ヒルミ・パシヤにとつては、官吏に登用されてから始めてのイスタンブルにおける職務であつた。この人事はキャミル・パシヤ内閣の内部対立によつて生じた内務大臣のポストを、三州総督として実績をあげたヒュセイン・ヒルミ・パシヤに与えたものであつた。ヒュセイン・ヒルミ・

パシャは、統一と進歩委員会を自己の勢力基盤とするため協調関係を持続させた。これは、統一と進歩委員会にとつても、有利な状況であった。この段階で、ヒュセイン・ヒルミ・パシャと統一と進歩委員会は、相互に勢力拡大の要素としていた。

キャミル・パシャ内閣と統一と進歩委員会の対立は、前述の如く、内閣成立時から継続していた。しかし、イギリスの支援を受けているキャミル・パシャは、立憲体制復活後も議会が未召集であることから、強力な対立勢力が合法的に存在しない状態を有効に利用し、その地位の確保にあたった。

青年トルコ人革命後のオスマン政府の不安定な状態は、革命政府が樹立されることなく、革命前の政体が残存し、革命勢力が政治的権力を獲得できなかったことに由来する。この政治不安は、国内の混乱のみでなく、対外関係にも不利益をもたらした。この政府内の勢力争いは、ブルガリアの分離独立、オーストリアによるボスニア・ヘルツェゴビナ併合、ギリシャのクレタ島併合などの領土喪失を招いた。このような事態にもかかわらず、統一と進歩委員会は自己の勢力確保のため、地方議会から選出される代議士を確保し、他勢力の浸透を防ぎ、議会での多数派工作をおしすすめた。さらに、青年トルコ人革命以前に統一と進歩委員会

のイスタンブル拠点が全く壊滅されていたことから、憲法擁護部隊と名付け、実際は統一と進歩委員会の警護隊の役割を果たす四個大隊編成の狙撃部隊をイスタンブルに派遣した²⁶。オスマン帝国軍の正規軍を非公然組織の統一と進歩委員会が一方的に編成し、移動させていることは、オスマンの混乱を示すと同時に、統一と進歩委員会の軍内における発言力の強大さを現している。また、統一と進歩委員会は、シラフダルと称する非合法武装部隊を持ちイスタンブルに送り込み、反統一と進歩委員会勢力に圧力をかけた²⁶。元来、統一と進歩委員会は政治的テロの体質を持っていた。キャミル・パシャと統一と進歩委員会の対立の中で、両勢力ともスルタン権力の削減に努め、スルタン親衛隊である第二師団およびスルタン府の武官団の解体が進行した。特に第二師団の解体は、イスタンブル政府の活動が容易になったといえる。また、第二師団の一部の反乱に狙撃大隊が投入されたことは、統一と進歩委員会の影響力の増大を示すものである。スルタン、アブドウル・ハミド二世は、政府と軍隊への影響力をいかに弱められていった²⁷。

一九〇八年二月に召集された第二次立憲体制下最初のオスマン帝国議会では、統一と進歩委員会が、絶対多数を占めることはできなかったものの、独立系の同調者を多数得て、議会内の最大勢力となった。これを背景に統一と進

歩委員会は、外交政策に介入しブルガリアと独自に接触するなど強引な行動を展開した²⁸。これに対してキャミル・パシヤは、依然としてサドラザムの幅広い権力を行使し、統一と進歩委員会に圧力を加えたために、双方の対立は激化した。キャミル・パシヤは、統一と進歩委員会のイスタンブルでの活動を押さえるため、狙撃大隊を、マケドニアの政情不安を理由に、イスタンブルから移動させようと計画したが、成功せずかえって、統一と進歩委員会との対立を決定的なものとした²⁹。さらに、一九〇九年、キャミル・パシヤは、統一と進歩委員会のクーデタ計画を公表し、閣内の統一と進歩委員会同調者を罷免した。しかし、統一と進歩委員会のクーデタ計画は事実無根であるとの反撃を受け、閣内では事態の説明を受けなかったヒュセイン・ヒルミ・パシヤ等の閣僚がキャミル・パシヤと対立した³⁰。

一連のキャミル・パシヤの工作は、閣内に意見の不一致を表面化させた。二月一二日、内務大臣ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、司法大臣レイキ・パシヤと共に辞表を提出した。翌日シエイフル・イスラムのジェラレディン・エフエンディと大蔵大臣ズイヤ・パシヤ、国家評議会議長ハサン・フエフミ・パシヤも辞任した。キャミル・パシヤは強行策をもってこの難局を乗り切ろうと、辞任した閣僚の後任に代理を任命した³¹。イギリス政府の支援を受けている

という自信が、キャミル・パシヤの強行策をもたらしたと考えられる。

キャミル・パシヤは、政権維持にあたって、イギリス政府を除くと強力な支持勢力を失い、統一と進歩委員会との対立は激化し、議会の内閣不信任案は百九八対八の圧倒的多数で可決された³²。これによって、キャミル・パシヤ内閣は倒された。

ヒュセイン・ヒルミ・パシヤ内閣

ヒュセイン・ヒルミ・パシヤ内閣の成立は、実質的には最初の統一と進歩委員会内閣と言えるものであった。

キャミル・パシヤ内閣を総辞職に追込んだ統一と進歩委員会は、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤをサドラザムに任命するよう、スルタンに圧力をかけた。統一と進歩委員会に協力的なサドラザム候補は、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤ以外存在せず、その、実力は未知数ではあったが、統一と進歩委員会は彼を推薦する以外方法はなかった。スルタン、アブドウル・ハミド二世は、統一と進歩委員会の構成員である帝国議会民衆院議長アメフメト・ルザと、副議長タラト³³の来訪を受け、「生命の危険」を感じ、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤのサドラザム任命に同意した。また、ヒュセイ

第二次立憲体制期の政治動向（設樂）

ン・ヒルミ・パシヤも、時期尚早と自身では考えて、スルトン府書記官長タフシン・パシヤに「キャミル・パシヤやサイト・パシヤの下で、しばらく経験を積んでから、サドラザムになることを望んでいた」と語っている。しかし、統一と進歩委員会は、内部に官僚政治家として政府内で活動したものはまったく存在せず、彼らに同調できる官僚政治家で、最も地位の高いのは、ヒュセイイン・ヒルミ・パシヤのみであった。このため統一と進歩委員会の中から政治的経験を積むためと外交政策への直接介入の道を開くためエンヴェル等の統一と進歩委員会の有力メンバーの駐在武官任命がなされた。エンヴェルの派遣されたオスマン帝国とドイツとの関係は、アブドウル・ハミド二世時代の友好関係が、復活され、第一次世界大戦への道を開いた。

ヒュセイイン・ヒルミ・パシヤは、青年トルコ人革命が成功すると、統一と進歩委員会の援助要請に対応し、彼らのイスタンブル進出を支援した。彼は、内務大臣就任後も統一と進歩委員会との関係は維持され、内務大臣時代、クーデタ事件でキャミル・パシヤと対立するなど閣内における統一と進歩委員会の意向の代弁者の要素も持っていた。統一と進歩委員会は、議会における絶対的優位性を確保し、政府を管理する能力を保持できたと理解し、ヒュセイイン・ヒルミ・パシヤを、自己の影響下に置いたごとく積極

的に政治介入をおこなった。ヒュセイイン・ヒルミ・パシヤは、サドラザムと内務大臣を兼任しており、異例の権力集中体制を築いていた。とくに有力な閣僚のいないヒュセイイン・ヒルミ・パシヤ内閣は、統一と進歩委員会の干渉を受け、統一と進歩委員会の傀儡政権の様相を呈していた。

統一と進歩委員会の閉鎖的な活動は、キャミル・パシヤやサバハティン・ベイ等の反統一と進歩委員会勢力を結束させ、統一と進歩委員会及びこれと同調するヒュセイイン・ヒルミ・パシヤ内閣に激しい抗議行動を生み出した。さらに、イスラム保守勢力もこれに加担し、統一と進歩委員会が自らの警護部隊として憲法擁護部隊と名付けて、イスタンブルに駐屯させた狙撃大隊の下士官・兵士が、一九〇九年四月一三日（ルミー暦一三二四年三月三十一日）に、三・三一事件と名付けられる反乱を起こした。彼らの要求項目は軍制改革にもなる強制退役の阻止であった。このため、統一と進歩委員会、ヒュセイイン・ヒルミ・パシヤ内閣（特に陸軍大臣）、職業軍人である陸軍士官学校出身者が攻撃目標となった。反乱兵は、オスマン帝国議会の議事堂周辺に集結し、議会に請願書を送り、軍制改革による特務将校の定員削減に対する地位保全要求を出すなど、議会を肯定する立場であり、立憲体制に反対ではなかった。

この事件により、統一と進歩委員会のイスタンブルにお

ける活動は一時的に、全く停止してしまっていた。

アフメト・テヴファイキ・パシヤ内閣

三・三一事件発生に対応できずにヒュセイイン・ヒルミ・パシヤ内閣は総辞職した。ヒュセイイン・ヒルミ・パシヤはじめ統一と進歩委員会の構成員は身を隠した。この事態にスルタン、アブドウル・ハミド二世はアフメト・テヴファイキ・パシヤをサドラザムに任命した。彼は、キャミル・パシヤ内閣の外務大臣であった保守派の実務派官僚政治家であり、統一と進歩委員会に協力的ではなかった。サロニカを始めとする、諸地方の統一と進歩委員会は、ヒュセイイン・ヒルミ・パシヤ内閣の復活を要求し、アフメト・テヴファイキ・パシヤ内閣への抗議電報を送った⁽⁴⁴⁾。また、統一と進歩委員会サロニカ本部は第三軍司令官マフムト・シェヴケト・パシヤと協力し行動軍のイスタンブル派遣を決定した⁽⁴⁵⁾。すでに、イスタンブル市内には統一と進歩委員会の活動拠点は全く失われていた。アフメト・テヴファイキ・パシヤ内閣は、事態の平静化に努め、反乱に同調することなく、混乱に対応していた。反乱兵士たちは、スルタンに要求の実施と反乱行為に対する恩赦を求め、自らも事態の收拾への方向を求めている。三・三一事件は、イスタンブル市内に反

乱軍が居ながらも、政府は存在し、反乱軍が精神的に支持したスルタンも、模様眺めの状態であり、奇妙な勢力均衡関係を作り上げていた⁽⁴⁶⁾。しかし、サロニカから派遣された反乱鎮圧のための行動軍が、イスタンブル近郊に進出してきており、混乱は避けられない状態であった

行動軍はイスタンブル市内に突入し反乱軍の抵抗を受けたが、市内の占拠に成功した。反乱兵の一部は、対岸のユシユクダルに逃れ、余力が充分でない行動軍は追撃ができなかった。しかし、反乱は鎮圧された⁽⁴⁷⁾。アフメト・テヴファイキ・パシヤ内閣は行動軍のイスタンブルに突入後も、辞任することなく継続した。統一と進歩委員会は、議会においてはアフメト・ルザが議長を辞任し、閣内には関係者は全くおらず、イスタンブル内の拠点を悉く失っており、ただちに、行政権を把握するに十分な能力も人材も保有していなかった。行動軍司令官であり第三軍司令官のマフムト・シェヴケト・パシヤは、戒厳令の下にイスタンブル市内の治安維持にあたった。この軍政下に、統一と進歩委員会は、イスタンブルにおける、活動が可能となった⁽⁴⁸⁾。

統一と進歩委員会は、イスタンブルを脱出した一部の民衆院議員と元老院議員を、行動軍がイスタンブル突入前、前線司令部を置いたイェシルキョイに集め、合同議会を設置し、行動軍の保護下にオスマン帝国議会の役割を持つよ

第二次立憲体制期の政治動向（設樂）

うになった。元老院議長のサイト・パシヤは、この合同議会の議長となり、統一と進歩委員会と密接な関係を持つこととなった^⑨。行動軍と共にイスタンブルに移動した合同議会は、オスマン帝国議会として活動を始め、スルタン、アブドウル・ハミド二世がこの反乱に関係を持っていたとして、彼を廃位に迫込み^⑩、新たにメフメト五世（スルタン、レシャト）をスルタンに擁立した^⑪。

官僚政治家であるサイト・パシヤは、統一と進歩委員会に接近し支持基盤の確保にあたった。官僚政治家は、強力な支援組織を持つことが必要であった。これまでのサドラザムが、それぞれの支援組織を、スルタン、統一と進歩委員会やイギリス・ロシアなどの外国政府に求めてきた。サイト・パシヤは、アブドウル・ハミド二世の保護下に、サドラザムを努めてきたが、立憲体制成立後は、アブドウル・ハミド二世との関係が疎遠となり、統一と進歩委員会との結合による権力接近工作を推し進めていた。

アフメト・テヴフィキ・パシヤ内閣は、三・三一事件発生直後には、統一と進歩委員会の各組織から激しい攻撃の電報を受けたが、上述のごとく、行動軍のイスタンブル突入後も存続した。しかし、統一と進歩委員会とは元来相入れない関係であったことから、統一と進歩委員会との関係は悪化し、五月になってヒュセイン・ヒルミ・パシヤが、

再びサドラザムに就任した。この人事は統一と進歩委員会の介入によるものであった^⑫。しかし、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、統一と進歩委員会の同意無しに何もできない状態であった。統一と進歩委員会は、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤ内閣と議会の両者を支配することにより、さらに権力の強化をはかった。憲法の改正による議会の内閣に対する優位性の確保、法律の制定による言論、出版の統制およびストライキの禁止など、統一と進歩委員会に反対する勢力の活動制限がなされた^⑬。憲法の復活により自由がもたらされたと歓迎した民衆に深い挫折感を与えた。青年トルコ人革命を人々は「自由の宣言 *Hürriyet İlanı*」と称しており、この一連の自由制限法は多くの反対派を生み、統一と進歩委員会は孤立化を進めた。ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、しだいに統一と進歩委員会との不和を増し、リンチ会社事件を契機に、一九〇九年一月二八日辞任した^⑭。

イブラヒム・ハック・パシヤ内閣

ヒュセイン・ヒルミ・パシヤの後任には、多くのサドラザム経験者が揚げられたが、結局、統一と進歩委員会と対立しないパリ駐在大使イブラヒム・ハック・ベイが、新サドラザムに任命され、一九一〇年一月一二日就任した^⑮。イ

ブラヒム・ハック・パシヤ内閣は、統一と進歩委員会の中
央委員の一人であるタラートを一九一〇年七月に内務大臣
として閣内に受け入れるなど、統一と進歩委員会内閣的な
性格を持っていた。⁵³一九一〇年九月、三・三一事件で行動
軍の司令官として事件の鎮圧に多大な貢献を果たした国防
大臣マフムト・シェヴェクト・パシヤが、統一と進歩委員
会の意見対立により、内務大臣タラート・ベイおよび大蔵
大臣ジャヴイト・ベイと閣議において対立し辞任を申し出
た。しかし、統一と進歩委員会は、マフムト・シェヴェクト・
パシヤの背後には、オスマン軍の将校団があり、これを敵
に回せないことから慰留工作にあたり、結局辞任は阻止で
きたが、一九〇八年革命の功績者の一人であるサドウク・
ベイの退役という結果になった。⁵⁴さらに、一九一一年五月、
大蔵大臣ジャヴイト・ベイ、文部大臣ハック・ベイの二人
が閣内の意見不一致から辞任し、統一と進歩委員会が支
えるイブラヒム・ハック・パシヤ内閣は統一と進歩委員
会内部対立によって混乱に陥った。統一と進歩委員会中央委
員会委員長のタラート・ベイと総書記のハジ・アディル・
ベイは、混乱を最小限にいとめた。⁵⁵一九一一年九月一五
日、イタリヤはトリポリ、ベンガジンに軍隊を派遣し、最
後通牒を告げ、翌一六日宣戦布告した。このため、ローマ
大使の経験を持ちながらイタリヤのトリポリ侵入を未然に

対応できなかったイブラヒム・ハック・パシヤは、サドラ
ザムを辞任した。⁵⁶

サイト・パシヤ内閣

後任にはサイト・パシヤが任命された。サイト・パシヤ
の経験が重視され、統一と進歩委員会の支援の下に内閣が
成立したが、サイト・パシヤにとつては、統一と進歩委員
会との協力関係は、サドラザムの地位確保の手段であつ
た。これは、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤのサドラザム就
任と同様である。

サイト・パシヤ内閣が成立したものの、トリポリ戦争は
苦戦を続けていた。また、一九一一年一月二日、自由
と連合党 *Hürriyet ve İtilaf Fırkası* がサドウク・ベイら
を中心に創設された。統一と進歩委員会に激しい攻撃を加
えるこの自由と連合党は、議会内に、また、統一と進歩委
員会内に同調者を多く持ったことから、統一と進歩委員
会自体に深刻な混乱を招いた。また、統一と進歩委員会に依
存するサイト・パシヤ内閣もその基盤を揺り動かされてい
た。⁵⁷

サイト・パシヤ内閣は、政治的混乱の続く事態解決のた
め、憲法第三五条のスルタンの権力に関する条項に、一九

○八年の憲法改正時スルタンの権限から削除した議会の解散権を再び加える議案を作成した。これは、議会内の反対派を排除するためスルタンの権限で解散させ、次の選挙で反対派を落選させるための手段であった。これに基づき、サイト・パシヤ内閣は、民衆院に一九一一年二月一六日上程したが、根回しの努力にもかかわらず、二月三〇日の議会は定足数に達せず、開会できなかつた。これはサイト・パシヤ内閣不信任と同じこととなり、サイト・パシヤはサドラザムを辞任した。

この事態の背景には、統一と進歩委員会の政治姿勢に内部からの不満が発生し、とくに第三軍の将校内に、統一と進歩委員会指導部と相違した意見を持つ者が多数出てきたことを示している。民衆院における自由と連合党の影響力は強く、統一と進歩委員会は、反統一と進歩委員会勢力を押さえるため、議会を解散しなければならなかつた。一九一一年一月一日スルタンは、さらに、サイト・パシヤをサドラザムに任命した。そして、再度、憲法第三五条改正案が上程されたが、三分の二の賛成を得ることができず、スルタンは、元老院に諮問し、民衆院の解散決定を得たのち、民衆院の解散の勅令を發した。総選挙が行われ、統一と進歩委員会は組織内の反対分子を徹底的に捜し出し、支部間の移動などの手段で、民衆院議員からの自由と連合党勢力

の排除に努力した。

一九一二年四月一八日に召集された議会では、憲法第三五条の改正案は二二対一五で可決された。しかし、議会で多数を占めることに成功した統一と進歩委員会ではあるが、アルバニアの独立、イエメンの反乱、イタリアのトリポリ侵入などの重要問題が解決されずに積み残されており、知識人や官吏、軍人を始め民衆の間で根強い不満が、統一と進歩委員会に対して向けられていた。これには二つのグループがあつた。ひとつは元サドラザムのキヤミル・パシヤ、もうひとつは大将のナーズム・パシヤがこれらのグループの先頭に立っていた。

一九一二年四月一二日、サイト・パシヤ内閣の政策に将校たちが不満を持ち反発行動を始めた、これに呼応してマフムト・シェヴケト・パシヤが陸軍大臣を辞任した。統一と進歩委員会との意見対立が表面化したものであり、サイト・パシヤ内閣は、混乱に陥つた。この将校グループはハラスカラ・ザブタ・グルブ *Halaskara Zabta Gurubu* と名乗つた。これにより、将校は大きく二つのグループに分かれた。サイト・パシヤは、外務大臣と協議し内外の諸問題を検討した。議会はこの問題に対して、一九一二年七月一五日信任投票を行い、四対一九四の絶対的多数でサイト・パシヤ内閣の存続を希望した。しかし、サイト・パシヤは、

翌七月一六日内閣を総辞職した。^⑧統一と進歩委員会は支持基盤としていたオスマン軍の将校の中から批判勢力が生まれたためその勢力は一時的に後退した。統一と進歩委員会に反対する旧官僚政治家がスルタンに接近し、保守派内閣が誕生することになった。

大内閣

後任のサドラザム候補者は、元老院議長ガジ・アフメト・ムフタル・パシヤ、民衆院議長ハリル・ベイ、ロンドン駐在大使アフメト・テヴフィキ・パシヤが挙げられた。^⑨三・三一事件の過中にサドラザムを勤めたアフメト・テヴフィキ・パシヤは諸要求を出し、その受け入れを条件にサドラザム就任を承諾したが、議会の解散要求のみは受け入れられず、結局この人事は消えた。^⑩そして、元エジプト駐在高等弁務官のアフメト・ムフタル・パシヤが一九一二年七月二日サドラザムに就任した。アフメト・ムフタル・パシヤは、ガジの称号を露土戦争での功績により授与されたオスマン帝国の実力者であったことから、どの党派にも属さずに、オスマン帝国議会が再開されると、元老院議員に任命され、三・三一事件後、サイト・パシヤの後任として元老院議長となっていた。

アフメト・ムフタル・パシヤ内閣は「大内閣」と名付けられたこれは、閣内に三人のサドラザム経験者がいたことに由来する。国家評議会議長キヤミル・パシヤ、法務大臣ヒュセイン・ヒルミ・パシヤ、内務大臣フェリド・パシヤの三人であった。また、シエイフル・イスラムのジェマレッティン・エフェンディが返り咲き、サドラザムの息子のマフムト・ムフタル・パシヤが陸軍大臣として入閣した。アフメト・ムフタル・パシヤ内閣は、議会で一一三対四五の票決で信任された。^⑪民衆院では、統一と進歩委員会が内部混乱で政治勢力としての力を弱めており、議会の反統一と進歩委員会として台頭してきた自由と連合党を、与党とした。統一と進歩委員会の従来の政策にとらわれることなく、統一と進歩委員会によって、流刑に処されていた者に恩赦を実行した。^⑫これは、統一と進歩委員会と明確に区別した政治姿勢を明らかにしたものである。

一九一二年、アルバニアの独立運動は激化された、アフメト・ムフタル・パシヤは、八月八日イブラヒム・パシヤをアルバニアに派遣して、平定にあたらせた。しかし軍内の不一致から武力鎮圧ができず、休戦交渉させ、八月一九日アルバニアの自治に関する協定が成立し、閣議で決定された。^⑬コソヴァ、マナスツル、ヤニヤ、シュコドウラの各州に大幅な自治権が付与された。これは、バルカン諸民族

第二次立憲体制期の政治動向（設樂）

の独立運動を刺激した。マケドニアのオスマン支配に反発するバルカン諸国は、オスマン帝国に対して一斉に攻撃を加えバルカン戦争が開始された。アフメト・ムフタル・パシヤはこの難局に病氣となり、閣議への出席も俟ならず、閣内に不満の声がでてきた。シェイフル・イスラムのジェマレットイン・エフエンデイは、「サドラザムは、何もしてない」と、攻撃側に回った。また、閣内の有力者であったヒュセイン・ヒルミ・パシヤも同調し、スルタンにサドラザムの更迭を求めている。スルタン、メフメト五世は、キヤミル・パシヤをサドラザムに考えた、一方、マフムト・シェヴケト・パシヤは、スルタンに会見した折り、サイト・パシヤをサドラザムに推薦している。結果は、スルタン、メフメト五世がヒュセイン・ヒルミ・パシヤの推薦したキヤミル・パシヤをサドラザムに任命した。

キヤミル・パシヤ内閣

ブルガリアはクルクキリセを陥落させた後、リュレブルガズの総攻撃を開始した。この翌日、一九一二年一〇月二九日キヤミル・パシヤ内閣が発足したが、戦局は悪化したままであり、政府はなすすべもなかった。バルカン諸国の攻勢はルメリの重要都市サロニカを占領し、さらにエデイ

ルネ包圍戦に至った。しかし、オスマン帝国にとつて、決定的な敗北が明確になると、事態の收拾のため、キヤミル・パシヤは、イギリスの仲介を求め、列強の干渉の下にエディルネを放棄しての休戦を決定した。これに対して、統一と進歩委員会はエディルネの確保を主張した。ユスフ・ヒクメト・バユルによれば、キヤミル・パシヤ内閣は、三つの勢力に分割されていた。第一は、内務大臣レシット・ベイと大蔵大臣アブドゥラフマンらのグループであった。彼らは全力をもって統一と進歩委員会と対立を表明していた。第二はシェイフル・イスラムのジェマレットイン・エフエンデイ、法務大臣アリフ・ヒクメト・パシヤ外務大臣ノラドウンギヤンらであり、彼らは統一と進歩委員会との対立を好まず、統一と進歩委員会への刺激を少しでも少なくすることを望んでいた。第三は、陸軍大臣ナズム・パシヤ一人ではあったが、統一と進歩委員会擁護派であり将校の支持をうけ、キヤミル・パシヤ内閣の中で最も影響力のある人物であった。彼は、レシット・ベイと対立関係にあった。このようにキヤミル・パシヤ内閣の閣内意見不一致が明確となり、統一と進歩委員会の政治的影響力の増加が見られる。サイト・パシヤ内閣の崩壊以来、野党にあった、統一と進歩委員会が再び政治介入の基盤が出来上がったといえる。

クーデタとマフムト・シェヴケト・パシヤ内閣

一九一三年一月二三日、統一と進歩委員会のタラート・ベイ、エンヴェル・ベイ等は、エディルネの回復を求め、この放棄を決定したキヤミル・パシヤ内閣を襲い、エンヴェルと話をするナーズム・パシヤを射殺し、キヤミル・パシヤにサドラザム辞職の文書の作成を強制し、内閣を倒した。エンヴェル・ベイは、そのままユルドウズ宮に、シェイフル・イスラムの専用車で乗り付け、キヤミル・パシヤのサドラザム辞任の文書を示し、マフムト・シェヴケト・パシヤを、新サドラザムに任命することを、スルタン、メフメト五世に強要した。

マフムト・シェヴケト・パシヤ内閣の成立は、統一と進歩委員会の工作によるものではあったが、統一と進歩委員会の指導者は、入閣せず、国家評議会議長にサイト・パシヤ、外務大臣には、エジプト王子で、マフムト・シェヴケト・パシヤの暗殺後サドラザムになったサイト・ハリム・パシヤが就任した。統一と進歩委員会は、ヒュセイーン・ヒルミ・パシヤ内閣成立後、一九〇九年から与党として、表面には出なかつたが、政権を補佐する側にあつた。しかし、混乱の増長を招いたのみで、結局政権担当の望みを失い、世論

からも支持されなくなつていった存在であつた。ここに、再び、エディルネの確保を旗印に政権に介入を開始した。スルタン、メフメト五世は、自身の立場を守るため常に強力な勢力に恐れを抱いていたといわれる。このため、統一と進歩委員会の介入により、マフムト・シェヴケト・パシヤ内閣が成立すると、スルタンは両者を支持する立場をとつた。

一九一三年五月二九日、ベヤジト広場に面した陸軍省の前に止まつた車に乗つていたサドラザム兼陸軍大臣マフムト・シェヴケト・パシヤが何者かに暗殺された。夕方、シェイフル・イスラムのエサト・エフエンデイと法務大臣のイブラヒム・ベイがユルドウズ宮にスルタン、メフメト五世との会見を申し込み、サイト・ヒルミ・パシヤのサドラザム任命を要請した。統一と進歩委員会として外務大臣のサイト・ヒルミ・パシヤを強く推薦した。これに対して、スルタン、メフメト五世は、ウィーン駐在大使であるヒュセイーン・ヒルミ・パシヤのサドラザム任命を考慮していた。このため、ヒュセイーン・ヒルミ・パシヤがウィーンからイスタンブルに帰還するまでの間、サイト・ヒルミ・パシヤを外務大臣兼任のサドラザム代理に据えることを考え、サイト・ヒルミ・パシヤに就任を要請した。しかし、サイト・ヒルミ・パシヤは、ヒュセイーン・ヒルミ・パシヤの内閣で

第二次立憲体制期の政治動向（設樂）

外務大臣を勤めることを拒否した。このため、スルタン、メフメト五世はスルタン府の官房長官と副長官の考えを聞いた。この結果両者ともサイト・ヒルミ・パシヤのサドラザム就任に問題がないとの意見をうけて、サイト・ヒルミ・パシヤのサドラザム任命を決定し、バブアリに伝えた⁽⁸⁵⁾。

サイト・ハリム・パシヤ内閣

サイト・ハリム・パシヤ内閣は、元老院議長にサイト・パシヤ、国家評議会議長に民衆院議長のハリル・ベイ、内務大臣にタラート・ベイ、陸軍大臣兼総参謀長にイゼット・パシヤ、厚生大臣にニザム・パシヤが、新たに任命され、他の閣僚は留任となった⁽⁸⁶⁾。

サイト・ハリム・パシヤ内閣は、ブルガリアとの休戦条約を締結しエディルネの放棄を決定したが、ブルガリアへの周辺諸国の攻撃が開始されたことに乗じてエディルネの確保に成功し国民の支持を得ることに成功した。特に、エディルネ確保に功績のあったエンヴェル・ベイは国民的英雄となった。統一と進歩委員会は、政治介入を試みてきたものの、人材の不足と政策の未熟さから、失敗してきた。しかし、トリポリ戦争やエディルネ回復のように戦術的な勝利を得ることは成功した。このエディルネ回復の功績

をもって、統一と進歩委員会の指導部であるエンヴェル・ベイは、閣僚の入れ替えによる統一と進歩委員会内閣の成立を目指した。エンヴェル・ベイは將軍に昇進し、エンヴェル・パシヤとなつて、陸軍大臣兼総参謀長に任命された、また、同じようにパシヤに昇進したジェマル・パシヤも海軍大臣になつた。ここに、統一と進歩委員会を一九〇八年の革命時から指導してきたエンヴェル・パシヤ、ジェマル・パシヤ、そして、タラート・ベイの三人が、サイト・ヒルミ・パシヤ内閣の閣僚となつたことは、統一と進歩委員会内閣が完成したと言える⁽⁸⁷⁾。

タラートがパシヤ位に昇進し、サドラザムとして、エンヴェル・パシヤ、ジェマル・パシヤと三頭政治を行うのは一九一七年二月三日になつてからである⁽⁸⁸⁾。

まとめ

青年トルコ人革命によつて成立した第二次立憲体制は、その成立過程から政權担当の方向性を持つていなかった統一と進歩委員会が、革命後、十分な準備もなく、政治部門である中央委員会を創設し、オスマン政界へ介入したことから、オスマン帝国末期の混乱におい打ちをかけ、更なる混乱に陥れ、第一次世界大戦参戦に向かわしめ、オスマン

帝国の崩壊をもたらした。

革命直後、統一と進歩委員会はイスタンブルに政治拠点
を全く持たなかったため、三州総督ヒュセイン・ヒルミ・
パシヤに依存しオスマン政界に進出した。革命後、旧来の
官僚政治家サイト・パシヤ内閣が、立憲体制下最初の政府
を担当し、スルタンの下から自立する政権樹立を試みたが、
基本的な権力地盤がスルタンであったことから、スルタン
との対立の中で失脚した。このため、サイト・パシヤとス
ルタン、アブドウルハミド二世との間は相互に対立する関
係となり、サイト・パシヤは、統一と進歩委員会へ接近し、
その力の利用を画策した。三・三一事件後、サイト・パシヤ
は統一と進歩委員会と協力関係となり、統一と進歩委員会
にサドラザム適任者を出す能力がないことを有利に対応し、
サドラザムに就任した。しかし、旧来の官僚政治家にとつ
ては、統一と進歩委員会の政治的展望の欠如を伴う奔放な
要求に応えられず、サイト・パシヤは、サドラザムを辞任
せざるをえなかった。

一方、統一と進歩委員会をイスタンブル政界に進出させ
た、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、新興官僚政治家とし
てサドラザムの地位を狙っていたが、やはり、支持勢力を、
政界進出支援の見返りとして統一と進歩委員会に求めた。
エーゲ海の島の小官吏から、才能を頼りに昇進を続けてき

た経歴を持つ、基本的には旧来の官僚政治家の域を脱し得
なかったヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、統一と進歩委員
会と同じように、予想していた時期よりも余りにも早急に、
求めていた地位が得られたため、十分な職務への対応がで
きなかった。このため、二度のサドラザムの期間は極めて
短かった。統一と進歩委員会との関係で、当初の優位を保
てることができず、結局、統一と進歩委員会の下から脱したヒュ
セイン・ヒルミ・パシヤは、キャミル・パシヤに接近して
いった。このように、統一と進歩委員会を、自己の勢力拡
大に利用する形で対応した者は、統一と進歩委員会の持つ
不安定さに応じられずに、その地位を失っていった。

これに対して、統一と進歩委員会と対立の立場にあつて、
サドラザムに就任したキャミル・パシヤは、支持勢力とし
てイギリス政府があつた。このため、スルタンへのイギリ
ス政府の干渉を武器にオスマン政府の担当者となつた。し
かし、統一と進歩委員会の議会での勢力を過小に評価した
り、軍との関係を無視したことによつて、キャミル・パシヤ
は、統一と進歩委員会によつて、二度にわたつて、内閣を
倒された。これは、統一と進歩委員会の青年トルコ人革命
後における勢力伸長が無視できない程度になつていたこと
を示している。アフメト・テヴファイキ・パシヤは、キャミ
ル・パシヤと同様に統一と進歩委員会とは、対立関係にあつ

第二次立憲体制期の政治動向（設樂）

たが、支持勢力を作ることなく、政治的手腕をもって、スルトンの側から、サドラザム就任を依頼され、混乱鎮静にあたったが、支持勢力の欠如は、内閣の維持を困難にしていた。

統一と進歩委員会は、サロニカ、パリの本部構成員に政治活動を経験した者は皆無の状態であり、その多くは第三軍の青年将校であり、陸軍大学を卒業した参謀将校ではあったが、行政関係についてはまったく知識が無かったと言えらる。タラート・パシヤにしても郵政省の一吏員出身であり、革命直後の国家行政には直接介入は無理であった。この政治問題介入の件は、もともと、統一と進歩委員会として関与せずに、政治は、旧来に伝統的な官僚政治家に任せることを主張する者が多数を占めていた。ムスタファ・ケマル・パシヤ、イスメト・イノヌ・パシヤ等は、この意見主張を支持していた。しかし、統一と進歩委員会の指導者たちは、秘密裏に政治部門の統一と進歩委員会中央委員会を創設し、中央委員の名前も公表しなかった。ここに統一と進歩委員会の権力中枢の不確定さがあつた。そして、統一と進歩委員会の政治部門は、オスマン政治に、官僚政治家のサドラザムを擁立する方法をとった。初めは、統一と進歩委員会の力が不十分であつたことから、官僚政治家の側がイニシアチブを取ろうとしたが、議会における統一と進歩委員会

の勢力拡大によって、失敗した。

統一と進歩委員会は、政治的力量を十分に蓄積した後も、人材の不足により、マフムト・シエヴケト・パシヤや、サイト・ハリム・パシヤ等の官僚政治家ではなく、軍の要人などの政治的影響力の強い人物をサドラザムに推して、オスマン政治の実権を握った。その後、エンヴェル・ベイ、ジェマル・ベイが、パシヤ位に昇進し、あわせて、両者ともダマト（スルトンの女嬪）になり、オスマン政界に進出するに十分な資格を得てはじめて、三頭政治を行うことができた。

青年トルコ人革命後、オスマンの伝統的な政治体制は崩壊することなく、革命勢力として生まれた統一と進歩委員会は、独自の政権を樹立できず、伝統的な政治体制を受け入れ、旧来の伝統的政治家の下にあつて、政治活動を行つた。統一と進歩委員会が、自ら政権を担当するには、パシヤ位と、スルトンの女嬪であるダマトの称号をもつてしなければならなかつた。統一と進歩委員会は、こうして革命勢力としての性格を失つたと言える。

注

- (1) 青年トルコ人とは、"ニト"ト憲法の復活を要求する全てのオスマン帝国民に与えられた名称である。(拙稿「青年トルコ人」の名称について『月刊シルクロード』四巻四号、二六—二七頁)青年トルコ人の中心的存在であった統一と進歩委員会の創設者イブラヒム・テモは、"アブドゥル・ハミド二世の専制政治が帝国の衰退の原因であるとし、専制政治を即時停止させ立憲体制復活を主張した。"Ibrahim Temo, *İhtilal ve Terakki Cemiyeti ve tesekkülü ve Hidemani Vataniye ve İnkılabı Mallye Dair Hatıratım*, 1939, Mecidiye (Romanya)。しかし、立憲体制復活後の政治体制については、青年トルコ人の中、言及している者はいない。
- (2) トルコ共和国初代大統領、軍人の政治不介入を、一九〇九年の統一と進歩委員会総会において主張した。このための調査がなされたが、結論を得ずに終わった。拙稿「行動軍の指導理念の変化」内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、一九八三年、八〇七—八一一頁。
- (3) 中央委員は、次のとおりである。Ahmet Rıza, Talat, Hayri Efendi, Hüseyin Kadri, Mithat Sükrü, Habib, Enver, İsmail Hakkı, Dr.Bahaeddin Sakir, Dr.Nazım。以下一〇名であった。Ahmet Bedevi Kur'an, *İnkılap Tarhizim ve İhtilal ve Terakki*, Istanbul, 1945, p.250.
- (4) Feroz Ahmet, *The Young Turks: The Committee of Union and Progress in Turkish Politics 1908-1914*, Oxford, 1969, p.17.
- (5) 主要な論文は次のとおりである。Feroz Ahmet 前掲書(注4)。
- (6) E.F.Ramsaur, *The Young Turks: Prelude to the Revolution of 1908*, Princeton, 1957.
Yusuf Hikmet Bayur, *Türk İnkılabı Tarihi*, Ankara, 1940-67.
Sina Aksin, *31 Mart Olayı*, Istanbul, 1972.
İsmail Hami Danişmend, *31 Mart Vak'ası*, Istanbul, 1961.
- (7) 統一と進歩委員会の記録は、"サロニカに集められていたが、サロニカ放棄の時、全ての記録が失われた。このため、回顧録が重要な史料となる。"M. Sükrü Hanioğlu, "Genesis of the Young Turk Revolution of 1908", *Osmanlı Arşivmalari*, III, Istanbul, 1982, pp.277-300. 此、青年トルコ人革命研究に回顧録の重要性を指摘している。
- (8) スルタン、アブドゥルハミド二世は、本来内宮業務を担当するスルタン府に、国家の行政権、軍事権、財政権等を管理する職権を与え、スルタンの専決によって政策が決定される。スルタン府の担当者の指示監督の下に国家組織が実施した。スルタンの意思決定は直接国政機関に伝わるのではなく、スルタン府を経由して伝達されるためスルタン権をより強化する体制となっていた。
- (9) スルタン府を構成する主要な部門は、事務総局(Mabeyn Kitabeleri)、財務局(Hazine-i Hassa)、侍従(Kürena)、武官団(Yaveran-ı Kiran)からなっていた。構成員は、事務総局の官房には首席官房長(Basmabeyinci)以下七名、書記は首席書

第二次立憲体制期の政治動向（設樂）

- 記官Baskatıp以下二五名、武官団は二六名の元師、六九名の將軍、二〇〇名の各階級の將校で参謀副官を構成し、その他を合計すると五、〇〇〇人になり、警備の兵士を含むと、スルタン府関係者は一、二〇〇人といわれる。C.V.Findley, *Bureaucratic Reform in the Ottoman Empire: the Sublime Porte 1789-1922*, Princeton, 1980, p.241.
- Vasfi Sensozen, *Osmanlıların Varlıklarını ve II. Abdülhamid'in Emlakı*, Ankara, 1982, pp.61-63.
- (10) スルタンの執務室は、ユルドゥズ宮にあって、首席官房長は隣室に控え、用件のある都度入室した。のちにメフメト五世の首席官房長になるルトゥフ・ハイは、アブドゥルハミド二世の首席官房長の伝達に頼りがあつたため、テルスブルク大使館の参事官職を失つてゐる。Lütfi Bey, *Osmanlı Sarayının Son Günleri*, Istanbul, nd, pp.20-23
- (11) スルタン宛の文書は首席書記官が処理した。首席書記官タフシム・パシャは、回顧録に多くの重要な記述を残してゐる。Tahsin Paşa, *Abdülhamid ve Yıldız Hatıraları*, Istanbul, 1946.
- (12) V. Sensozen 前掲書（注9）, pp.42-60.
- (13) Mithat Sükrü Bleda, *İmparatorluğumuzun Coklusı*, Istanbul, 1979, p.51.
- (14) Y.H.Bayur 前掲書（注9）, p.69.
- (15) Şevket Süreyya Aydemir, *Emver Paşa*, Istanbul, 1971, cilt.2, p.52. 代表団の構成員にアイディシルは、エンヴェル・ハイを入れてゐるが、ハユールの前掲書に引用されてゐるサロニカからの電報には名前が無さ（p.69）。
- (16) Ali Cevat Bey, *İkinci Meşrutiyet'in İlanı ve Oluşbir Mart Hadisesi*, Ankara, 1960, p.163.
- (17) Ali Cevat 前掲書（注16）, pp. 76-78.
- (18) Ali Cevat 前掲書（注16）, p.19.
- (19) 一九〇八年の選挙において、統一と進歩委員会の構成員は六九議席を獲得し、統一と進歩委員会に対抗する自由派は六七議席を占めた。残る百七九議席は無所属議員によつて占められた。彼らは各地方代表の傾向を持ち、統一と進歩委員会に同調する傾向にあつた。F. Ahmet-D. A. Raustou, "İkinci Meşrutiyet Döneminde Meclisler 1908-1918", *Güney-Dogu Avrupa Araştırma Dergisi*, 4-5, 1975-1976, pp.245-284.
- (20) イギリス政府はキヤミル・パシヤに Grand Cross of Bath 勲章を授与してゐる。これは、タンジマートのサドラザムであつたレシット・パシヤ以来四〇年の間で二度目のことであるほど、イギリス政府は、キヤミル・パシヤを支援してゐた。英国王エドワード七世はキヤミル・パシヤをサドラザムに任命するようアブドゥルハミド二世に要請した。また、キヤミル・パシヤもサドラザム就任にあつて最初にイギリス大使との会見をした。S.Aksin 前掲書（注9）。
- (21) Mithat, *Hatıralarım 1895-1946*, Istanbul, 1946.
- (22) Ali Cevat 前掲書（注9）, pp.8-9. ハシム・パシヤがアルバニア人であり、アブドゥルハミド二世と対立し、トリポリに左遷された。サバハティン・ベイらと、イスタンブル占領を計画し、サバハティン・ベイらの内紛によつて中止した。しかし、スルタン、アブドゥル・ハミド二世はレジューブ・

パシヤの陸軍大臣就任を歓迎した。このように、オスマン政府は一時的安定が見られたが、レジェフ・パシヤは着任の翌日、執務室で急死した。

(22) 統一と進歩委員会は、スルタン、アブドウル・ハミド二世がドイツと友好関係にあり、特にヴァイルヘルム二世との関係が密であったことから、反ドイツ政策をとっていたが、キャミル・パシヤとの対立から、反イギリス政策に転じ、ドイツへの接近をはじめた。もとより、陸軍士官学校出身者はドイツ人軍事顧問団の教官から教育を受けており、マフムト・シェヴケト・パシヤやエンヴェル・ベイ等は、親ドイツ派であった。

(23) ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、ミディリ島の小官吏から当時の郡長であったナムク・ケマル等の推薦を受けて昇進し、中央の高級官僚となった有能とされる官僚の一人である。

(24) 元老院議員はスルタンの任命の終身議員であった。第一次立憲体制期の議員は三名が残っていたのみであった。第二次立憲体制開始にあたって、スルタンは、閣僚の中からも任命したため、閣僚に欠員が生じた。このため、イブラヒム・ハク・ベイがキャミル・パシヤとの対立で文部大臣に内務大臣から代わっていたところが、再び内務大臣に任命されたことに、反発し、ローマ大使への転出を希望した。空席となった内務大臣にヒュセイン・ヒルミ・パシヤが任命された。

Ali Fuad Türkgeldi, Görüp İstiklerim, Ankara, 1949, pp.17-18.

(25) Ali Cevat 前掲書 (注19), p.174.

(26) 統一と進歩委員会には、シエムシ・パシヤを、マナストゥールで暗殺するなど、敵対勢力に対しては、政治的テロも辞さない空気があった。 Kazım Karabekir, *İttihat ve Terakki*

Cemiyeti 1896-1909, Istanbul, 1945, pp.224-228, pp.281-283.

(27) Ali Cevat 前掲書 (注16), p.19, p.120.

(28) スルタン府の武官団の人員削減、アルパニア・アラブ兵団の解体については、陸軍大臣の命令によって、実施された。

Ali Cevat 前掲書 (注19), p.166.

(29) Y.H.Bayur 前掲書 (注5), p.167.

(30) Ali Cevat 前掲書 (注19), p.129.

(31) 一九〇九年二月一〇日、キャミル・パシヤは、陸軍大臣アリルザ・パシヤ、海軍大臣アリフ・ヒクメト・パシヤを突然解任し、後任に、ナーズム・パシヤ、ヒュニユス・パシヤを各々任命した。陸・海軍大臣の任免は、サイト・パシヤのサドラザム辞任問題に関係あった重要問題であるが、内閣、議会に何の連絡も無く行われたことに閣議でも疑問が出た。内務大臣ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは、キャミル・パシヤに質問したところ、統一と進歩委員会が、スルタンにユスフ・イゼティン・エフエンディを擁立するクーデタを計画しているため、統一と進歩委員会と関係のある陸・海軍大臣を罷免したと述べている。しかし、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤ等は、このクーデタ計画の存在を否定し、また、統一と進歩委員会も声明を出して、キャミル・パシヤに對抗した。この件について議会でキャミル・パシヤの答弁が要求された。キャミル・パシヤは、議会への出席を拒み、その結果、不信任案が上程された。 The Times, 1909.2.11, p.5, 1909.4.6, p.5. Ali Cevat 前掲書 (注16), p.35-6. 統一と進歩委員会の声明文については、Ali Cevat 前掲書 (注19), p.128.

(32) Halli Mentege, *Osmanlı Mebusan Meclisi Reisi Halli*

第二次立憲体制期の政治動向 (設樂)

Mentege'in Anlari, Istanbul, p.15.

- (33) 統一と進歩委員会は、民衆院で絶対的勢力であったことから、正副議長を独占していた。二人の要求は統一と進歩委員会および議会の要求でもあった。Ali Cevat 前掲書 (注16), p.36.

(34) Abdülhamid, *İkinci Abdülhamid'in Hakira Defteri*, Istanbul, 1960, p.136.

(35) Türkgeldi 前掲書 (注24), p.23.

- (36) 統一と進歩委員会の指導者のエンヴエール・ベイ、フェトヒ・ベイ、ハフズ・ハク・ベイ等三名の参謀少佐は各々、ベルリン、パリ、ウィーンの駐在武官に任命された。Ali Cevat 前掲書 (注19), p.176.

(37) アブドウルハシド二世時代、軍学校はドイツの軍事顧問団の教官が多く、陸軍士官学校出身者には、マフムト・シェヴェケト・パシヤなど親ドイツ的なものが多かった。三・三一事件で、行動軍が機材等の劣悪な状態の鉄道による移動を迅速に行ったのも、ドイツの支援があったからだともいわれる。

(38) ヒュセイン・ヒルミ・パシヤ内閣の成立とともに、在外公館あてに外交政策の不変を伝えたが、統一と進歩委員会は同時に、*The Times*, *Daily Telegraph* の両紙に電報を送り同様の事項を伝えてくる。Sina Aksin 前掲書 (注5), p.38.

(39) アリ・ハイダル・ミットハトのマドリド大使任命にあたって、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤは何の指示も出さず、エンヴエール・ベイが統一と進歩委員会の本部での指示を受けるよう命じている。Ali Haydar 前掲書 (注20), p.209.

(40) 統一と進歩委員会とヒュセイン・ヒルミ・パシヤ内閣を激しく攻撃していたセルベスト紙の主筆ハサン・フェフミ・ミ

イが、一九〇九年四月六日ガラタ橋の上で何者かにピストルで射殺された。これに対して、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤ内閣は犯人捜査に積極的態度を示さなかったため、さらに反対派を刺激した。彼の葬儀には数千人が参加した。Sina Aksin 前掲書 (注5), p.49-50.

(41) 拙稿「青年トルコ人とオスマン朝軍—将校の出自に関する問題を中心に—」『中嶋敏先生古稀記念論集』下巻、汲古書院、一九八一年、五七一—五七三頁。

(42) Ali Cevat 前掲書 (注16), p.55. I. H. Danişmend 前掲書 (注5), p.36.

(43) アフメト・テヴフィキ・パシヤは、統一と進歩委員会の勢力下でのオスマン政府には一切介入せず在外勤務にあった、(ロンドン大使一九〇九—一九一四) 第一次世界大戦後サドラザムになつてゐる。

(44) アフメト・テヴフィキ・パシヤへの抗議電は、ヒュセイン・ヒルミ・パシヤのサドラザム復帰要求であり、宛名も前外務大臣 (Haricve Nazir-i Sabki Tevlik Pasaya) もしくは、サドラザム職を占拠する前外務大臣などが使用されていた。I. H. Danişmend 前掲書 (注5), p.57-97 に電文が載せられてゐる。

(45) 拙稿前掲論文 (注2) 参照。

(46) アブドウルハシド二世は、三・三一事件後、反乱を支援したとの理由で廃位されたが、この事件への関与はしていなかったとの説が多い。

(47) I. H. Danişmend 前掲書 (注5), p.123.

(48) 戒厳令は行動軍のイスタンブルに突入前、マフムト・シェヴェケト・パシヤの圧力により一九〇九年四月二三日にアフメ

- ト・テヴフィキ・パシヤ内閣によって決定された。布告文は I.H. Danışmend 前掲書 (注5), p.136-7.
- (49) 民衆院議長のアフメト・ルザ・ベイは辞任しており、合同議会 Meclis-i Umumi-i Milli は元老院議長サウト・パシヤが議長となった。
- (50) 合同議会の決定に対し、シエイフルイスラムのズイヤエティン・エフエンディはフェトヴァを出すことを一旦拒否したが、タラート・ベイの強制により議院内で作成した異例の事態であった。Abdulkadir Altunsoy, *Osmanlı Seyhülislamları*, Ankara, 1972, p.223.
- アブドウルハミド二世への通告は、元老院議員アリフ・ヒクメト・パシヤ、アルメニア・カトリック教会主教アラム・エフエンディ、民衆院議員ドラチ選出エサト・パシヤ(アルバニア人)、サロニカ選出エマヌエル・カラス・エフエンディ(エダヤ教徒)の四人であった。Ali Cevat 前掲書(注16), p.81. スルタンの廃位に異教徒の介入は後まで問題となった。
- (51) アブドウルハミド二世は弟のメフメト・レシヤトを政治から隔離していたが、スルタン府の協力と、統一と進歩委員会の内紛によりメフメト・レシヤトが台頭した。
- (52) アフメト・テヴフィキ・パシヤは、スルタン、メフメト五世の下の新内閣に統一と進歩委員会の関係者の入閣を要請したが、拒否された。I.H.Danışmend 前掲書(注5), p.204.
- (53) タラート・ベイは、三・三一事件でのアフメト・テヴフィキ・パシヤの業績を評価したが、混乱を増長させたとして辞任をせまった。Türkgeledi 前掲書(注24), p.46.
- (54) Serseriler ve Zanlı Kışirlerle İlgili Kanunu, 1909.5.14 Kanun Toplantıları Kanunu, 1909.6.17

- Basın ve Yayın Kuruluşlar Kanunları, 1909.7.31.
 Greveler Kanunu, 1909.8.15
 Musluman Olmayan Vatandaşların Askere Alınmasında İlgili Kanunu, 1909.8.11.
 Ceniyeler Kanunu, 1909.8.23.
 これらの法律は、政府に不満を持つ者にたいする弾圧のためであった。Feroz Ahmed, *İhtihazi ve Terakkî(1908-1914)*, İstanbul, 1972, p.99.
- (55) Prof. Tarık Z. Tunaya † *Hürriyetin İlan İçinci Meşrutiyetin Siyasi Hayatına Bakışlar*, İstanbul, 1959. を著している。
- (56) イギリスの会社リッチに対するユーフラテス川の水運利権譲渡問題で反対運動が激化し政府と統一と進歩委員会への非難が増し、ロッセイン・ホルシ・パシヤと統一と進歩委員会の間も意見の対立が生じた。Lütfi Bey (注10), p.107.
- (57) ローマ大使から任命された。キヤミル・パシヤ内閣で文部大臣であり、大学で国家法を講義するなど法律に詳しく、新たにヴェズイルとパシヤ位階を受けパシヤとなった。若くことから世論は期待した。Halid Ziya Uşaklıgil, *Saray ve Ötesi*, İstanbul, 1965, pp.169-170.
- (58) Talat Paşa, *Talat Paşa Hatıraları*, İstanbul, 1946, p.40.
- (59) 統一と進歩委員会マナストウル本部の責任者。第十四騎兵連隊長。青年トルコ人革命の先駆けであるニヤーズ・ベイの武装蜂起を秘密裏に指導し、支援した。Ahmet Niyazi, *Hatıratı Niyazi*, İstanbul, 1326 R. pp.
- この時は、参謀本部騎兵部副部長であり、政府に不満を持ち統一と進歩委員会内に新組 Hizbi Cedid を結成した。

第二次立憲体制期の政治動向 (設案)

- Y.H.Bayur. 前掲書(注5), pp.55-56. Lütfi Bey 前掲書(注9), pp.197-199.
- (9) Dr.Rifat Üçarol, *Gazi Ahmet Muhtar Paşa(Aşkeri ve Siyasi Hayat) Bir Osmanlı Pasası ve Dönemi*, İstanbul, 1976, p.328.
- (10) イブラヒム・ハック・パシヤは、スルタン府官房長ルウト・ヒ・ハイを招き相談の結果、サドラザム辞任を決定し、後任に経験豊かなサイト・パシヤを推薦した。Lütfi Bey 前掲書(注10), p.236.
- (62) Tarık Zafer Tunaya, *Türkiye'de siyasal Partiler Cilt 1 Hincisi Meşrutiyet Dönemi*, İstanbul, 1984, pp.263-312.
- (63) 民衆院内に統一と進歩委員会から離脱した議員が揃って成立した政党であるから、議員数も全議員の三分の一を占め、統一と進歩委員会の一党独裁的議會を牽制した。
- (64) Dr.R.Üçarol 前掲書(注60), p.329.
- (65) この一九一二年の選挙は「暴力選挙 *Sopali Seçim*」と称される。結果は、自由と連合党の議席が一五以下であった。T.Z.Tunaya 前掲書(注62), p.276.
- (66) キャミル・パシヤは自由党「ナリズム」・パシヤは後述する「ラスカラ」を支持基盤とした。Dr.R.Üçarol, 前掲書(注60), p.331.
- (67) Y.H.Bayur 前掲書(注5), 2-1, p.249. T.Z.Tunaya 前掲書(注62), p.313-344.
- (68) Y.H.Bayur 前掲書(注5), 2-1, p.275.
- (69) Dr.R.Üçarol 前掲書(注60), p.337. Lütfi Bey 前掲書(注10), p.299.
- (70) 議會の解散によるアフメト・テヴァフィキ・パシヤの不正選挙を否定する要求は受け入れられなかった。また、タラート・シイはキャミル・パシヤのサドラザム就任に反対を表明した。H.Z.Usaklıgil 前掲書(注57), p.321-322.
- (71) Dr.R.Üçarol 前掲書(注60), p.355.
- (72) 一九一二年八月一日三・三一事件に連座したキャミル・パシヤの息子 Kamil Paşa zade Sait Paşa。パリで統一と進歩委員会への破壊工作を行った元パリ大使ムニル・エフエンディ Munir Efendi。など統一と進歩委員会に対抗した者がほとんど釈放された。T.Z.Tunaya 前掲書(注63), p.307-310.
- (73) Dr.R.Üçarol 前掲書(注60), p.379-380.
- (74) イタリアとの間にトリポリ戦争の終結が決定した一九一二年一月二日の二日後の、一月四日にバルカン戦争が開戦した。
- (75) İbnülemin Mahmut Kemal İnal, *Son Sadrazamlar*, İstanbul, 1982, 4.cilt, p.1823.
- (76) Dr.R.Üçarol 前掲書(注60), p.438.
- (77) *Türkgeldi* 前掲書(注62), p.67.
- (78) Lütfi Bey 前掲書(注10), p.330-331. しかし、その後のアフメト・シエヴケト・パシヤ、サイト・ヒルシ・パシヤの両内閣もエニエルネ回復は決定できなかった。Mustafa Ragıp Esatlı, *İttihat ve Terakki*, İstanbul, 1975, p.157.
- (79) Y.H.Bayur 前掲書(注5), p.258-259.
- (80) ナズム・パシヤは統一と進歩委員会と同調の姿勢を持っていたが突入したエンヴェルと話し合いをしようとした時、突入者のひとりヤクブ・シエヒルによって副官ともども射殺された。エンヴェルはましがいで射殺されたと述べている。

- Y.H.Bayur 前掲書(注5), p.269.
 Türkgeldi 前掲書(注24), p.89.
 (82) Türkgeldi 前掲書(注24), p.88-89.
 (83) Türkgeldi 前掲書(注24), p.90.
 (83) Türkgeldi 前掲書(注24), p.110.
 (84) Türkgeldi 前掲書(注24), p.112.
 (85) Türkgeldi 前掲書(注24), p.112-114.
 (86) Türkgeldi 前掲書(注24), p.115.
 (87) Türkgeldi 前掲書(注24), p.124.
 (88) Türkgeldi 前掲書(注24), p.141.

(本学文学部教授)

The Ottoman Empire's Second Constitutional Regime

by SHIDARA, Kunihiro

第二次立憲体制期の政治動向（設樂）

From the time that the Constitution was restored in the Ottoman Empire in 1908, the Sultan's authority was indeed weakened, but the Grand Vezir and traditional bureaucrats still formed the nucleus of the regime in the form of a cabinet. Under this second Constitutional regime, the Committee of Union and Progress (CUP), which had actively contributed to the restoration of the Constitution, insisted on joining the regime.

Despite their low-ranking in the Ottoman hierarchy, such Committee members as Enver, Cemal, and Talat took various measures to obtain important posts in the government, but not successfully. These three Turks then tried to intervene in the regime by controlling the Parliament and thus exerting influence on the Grand Vezir. However, they still did not succeed in obtaining any top positions in the regime, their political ambitions frustrated twice by anti-CUP groups.

In 1913 the CUP led a coup d'état, first to put one of the Committee members in the post of Grand Vezir, later to replace it with a triumvirate regime instituted by the same three Turks who occupied such important positions as Damat (Sultan's son-in-law) and Pasha. Representing the regime, they implemented various policies that eventually changed the course the Ottoman Empire took during that time, but were obviously not successful in preventing the Empire's downfall.